

中村圭介著 / 連合総合生活開発研究所編

『壁を壊す』(連合新書16 労働組合必携シリーズ ) 教育文化協会 (2009年)

本書は、非正規労働者の組織化を行った10単組へのインタビュー調査をもとに、現在、そして、これから非正規労働者の組織化に取り組む、主に単組の組合役員に向けた非正規組織化のための「必携本」としてつくられている。この本に登場する組合は製造業、卸売・小売・飲食店、鉄道、公務と様々な業種で構成されており、非正規労働者の比率やこれまでの組合の歴史、労使関係の形などもそれぞれ異なる。

タイトル「壁を壊す」の「壁」とは、正規労働者と非正規労働者、言い換えれば、正規労働者を中心に組織された企業別組合と非正規労働者との間にある「壁」である。本書では、「壁」を壊すこと(=組織化)に成功した単組の事例から、まず、非正規労働者組織化に至った背景を辿ったうえで(第二章 危機の察知)、単組内でのリーダーの決断と執行部内での合意形成の過程(第三章 異論と説得)と、実際の非正規組織化の際の戦略(第四章 組織化の実際)を紹介する。そして最後に、組織化によってもたらされた成果および今後組織化に取り組む組合が学べるものは何か(第五章 壁の崩壊)について論じている。また、巻末には「壁を壊す」チェックシートが掲載されており、非正規組織化までのステップアップが視覚的にわかりやすく示されている。

日本の労働組合において、近年、非正規労働者の組織化は最優先課題の1つとなっているが、それは組織化の当事者たちにとってどのような意味を持つのだろうか。非正規労働者にとっては、雇用の安定や処遇改善のため、一方、企業別組合にとっては組織(の機能)存続のための組織化だといえる。著者が「非正規労働者を組合に『入れてあげた』のではなく、彼らに組合に『入ってもらった』」と表現しているように、この本は、一貫して後者の視点、すなわち、現在の日本の労働組合には集团的発言メカニズムの危機が迫っており、各企業別組合が過半数代表を維持するためには非正規労働者を組織化しなければならない、という問題意識をもとに展開されている。加えて、興味深いことは、非正規組織化による成果が発言メカニズムや代表制の維持という面だけでなく、まず、非正規労働者の労働条件の向上という形で表れ、また、非正規労働者の組合参加が組合全体の活動の活性化をもたらしているということを実際の単組の事例が証している点にある。

今号の特集である「非正規組合員の組合費」に関連して、組合費の問題は、組織化対象となった非正規労働者の労働組合への加入行動に大きな影響を及ぼす。それは、組合費の使われ方、組合費を支払うことによって何がもたらされるのか、という問題である。第四章では、非正規労働者の組合費への反応と、それに対して企業別組合がどのような対応をとったのかが描かれている。そして、「組合活動にお金がかかる」ことを非正規労働者に認識してもらうための方策として、第一に、非正規労働者から出た不満や要望にすぐに対応して組合を体感してもらうこと、第二に、組合費を払うことで何を見返りにもらえるのかという発想ではなく、彼ら・彼女らに職場をよくするための組合活動を担う重要なメンバーであることを伝えることの大切さが示されている。つまり、正規労働者と非正規労働者の「壁」を打ち破るためには、雇用形態を超えてともに「職場をよくしていこう」というメッセージが必要であり、また、そのことによって、組合費に対する非正規労働者の理解も深まるということであろう。

非正規労働者の組織率は徐々に上昇しているものの、未だ多くの非正規労働者が未組織のままであり、また、多くの組合にとって、非正規組織化は難しい課題であり続けている。しかし、10単組の活きた事例は非正規組織化の「壁」は壊せるということを実感させてくれるに違いない。

(後藤 嘉代)